

IPP選定

「2021 年包装界・10 大ニュース」

① ハイバリア性紙製包材開発を強化、環境負荷低減に一役貢献

大手印刷会社のD社やT社はフィルムパッケージと同等レベルのバリア性がある紙製のパッケージを開発した。各社ともハイバリア性紙製包材の開発競争を進めており、再生可能資源である紙を使用し、フィルムパッケージと比較してプラスチック使用量を削減するのはもちろん、従来の紙バリア品が抱えていた“遮光性”や“中身を見せたい”課題にも対応するなど、機能性を向上させた商品もある。

② コロナ禍での通販市場拡大と通販梱包箱に易開封機能付与の流れ

コロナ禍でのネット通販増加に伴い、大手通販会社では消費者が安全で簡単に開梱できるような配慮の展開が始まった。段ボール箱の側面封緘テープ終端部位置に付設した切り込みを押し込み、引き上げた後テープの浮きをつまんでそのまま剥がす事例や、外装箱の側面に切り込みを入れて手が入るスペースを設け、苦勞せず簡単に内容品を取り出せるなど易開封についての提案がなされている。

③ プラスチック資源循環促進法成立、2022年に施行。資源循環の動きが加速。

2021年6月に「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」が成立。また同法律の政省令・告示が2021年度中に公布され、2022年4月1日に施行される予定。同法ではプラスチック製品製造業者に対しては環境に配慮した製品設計や自主回収・再資源化、また飲食店等に対しては使い捨てスプーン等の提供に関し、廃棄物抑制等が求められており、それぞれの取組みを実行する際の判断基準や仕組みが設けられている。同法の施行に従い日本でも資源循環の動きが加速することになる。

④ 原油価格高騰による原料高騰、包装資材価格に影響

ワクチン接種や自粛生活で新型コロナウイルスの感染者が減少し、経済の復旧が検討される中、原油の高騰を受け石油化学製品の基礎原料ナフサの高騰が続き、食品、ガソリン、電気、ガスに続いて、包装資材に幅広く使用される汎用合成樹脂も値上げが相次いだ。これに伴い包装資材の価格も値上げ表明が続きメーカー各社は7月からPE、PPを5~8%程度、PSは10%超引き上げている。その他に印刷用紙なども値上げとなった。

⑤ SDGsの認知度が急速に高まる。

コンサルティング会社のB社は有力企業210社を対象にSDGsの認知度調査を実施。「詳細な内容を知っている」と答えた人は5.9%、「ある程度の内容は知っている」は30.5%。2020年の調査結果と比べると大幅に増えており、「知らない」は半分以下に減っている。SDGs企業評価では自動車業界の取組みが最も高く評価されているが、食品業界や小売り・流通関連の企業も上位にランクイン。他に包装材料メーカーが「作る責任、使う責任」としてリユース・リサイクルに取り組む報道も発出されている。

⑥ 抗菌・抗ウイルス製品の販売増加

新型コロナウイルス感染防止のため、インキや表面加工メーカー、包装メーカー各社が次々と抗菌・抗ウイルス加工を施した製品を開発・販売を始めた。製品の表面に付着した菌の増殖を抑制することができる抗菌加工や製品の表面に付着したウイルスを減少させることができる抗ウイルス加工が、衣料などの繊維製品、プラスチックなどの樹脂製品、金属製品、紙製品などに広く用いられ、国内の抗ウイルス素材市場で2021年は2019年比2倍に近い172億円が予測されている。

⑦ プラスチックリサイクル原料の採用事例拡大へ

全国清涼飲料連合会は2030年までに使用済PETボトルの「ボトル to ボトル」比率50%を目指すことを発表。ある食品メーカーでは、油分を含むドレッシング用容器にもメカニカルリサイクルしたPET原料が採用され動向が注目される。さらに、トイレタリーメーカーでは、プラスチック包装容器資源循環型社会の実現に向けて販売店が連携し、洗剤やシャンプーなどの使用済詰め替えパックの分別回収実験を実施。店頭回収したフィルム容器はメーカー内のパイロットプラントで再生処理を行う。

⑧ 学校給食にストローレス牛乳紙パック採用拡大で脱プラ加速

大手製紙会社N社が製造・販売を開始したストローレス学乳容器の採用が相次いでいる。「脱ストローによる環境問題への貢献」と「学校での環境教育の実践材料となりうること」が評価されている。日本全国の紙容器学校給食牛乳の消費量は年間約14億パック、ストロー1本の重量を0.5gとすると、約700t/年の樹脂が使用されている。

同商品は屋根型の下部の作りを工夫し、指を入れやすく簡単に開封できて、独自の罫線を入れることにより注出口の傾斜を調整、スムーズに飲めるようにした。本商品は2021年の日本パッケージングコンテストで経済産業省製造産業局長賞を受賞した。

⑨ フルオープン缶で自然発泡する缶ビール

缶の蓋をあけると泡が自然に湧き出し、生ジョッキ感覚でゴクゴク飲める缶ビールが、大手ビールメーカーより発売された。フルオープン缶で、胴内の特殊塗料により自然発泡を実現。飲料缶初のダブルセーフティ加工（口切れ防止）を採用し、日本初の生ジョッキ缶となった。コロナ禍の家飲み需要を見据え4月発売、数量限定で出荷するたびに数日で完売する状態が続いた。本商品は2021日本パッケージングコンテストで公益社団法人日本包装技術協会会長賞を受賞した。

⑩ コロナ禍でTOKYO PACK 2021、暮らしの包装商品展 2021、初の同年開催

TOKYO PACK 2021は「未来(あす)を拓く 包みのテクノロジー」をテーマに、2月24日(水)～26日(金)に東京ビッグサイト西館と南館を使用して開催された。コロナ禍におけるリアル開催で海外からの参加がほとんどなく、来場者も人数制限するなど厳格な感染対策をとるなどはじめての事ばかりであった。また同年10月21日(木)～22日(金)には暮らしの包装商品展 2021が開催された。TOKYO PACK会場となる東京ビッグサイトが東京オリンピック・パラリンピックの報道センターとして使用のため、開催を6ヶ月遅らせたことにより、TOKYO PACKと暮らしの包装商品展が初の同年開催となった。